



ホルモン療法の使い分けと 使用中・使用後のあるある

ホルモン療法は産婦人科医にとって外来診療における切札である。その対象疾患は多岐に及び、その効果はほかの薬剤と違って切れ味が鋭いことが多い。そして、それでも埒が明かない場合は手術療法という最後のカードを切らざるを得ない。切札のホルモン療法にも、最近は複数の選択肢があってどのカードを切ったらいいか困る場合に、自分の好みのカードばかりを切っている方もおられるのではないか。切札を切った後でも副作用対策やいつまで使うかなど使用中や使用後によくある疑問に対して答えがない場合に、独自の方法を試されている方もおられるのではないか。

ホルモン療法が活躍する状況は、無月経、月経不順、排卵障害、不妊症、生殖補助医療、過多月経、月経困難症、月経前症候群、更年期障害、卵巣欠落症状、骨粗鬆症予防、避妊と緊急避妊、子宮内膜増殖症、子宮体がん再発予防、切迫早産など、婦人科から産科まで広範囲に及ぶ。病態別にみることで使用する薬の選択肢が絞られ、そのなかから最終的にどのホルモン療法にするかは患者に選んでもらうことになるが、患者の状況、年齢、月経の状況、血圧、喫煙の有無、乳がん合併の有無、患者が何に困っているか、何を優先して希望しているのか、いつ頃に妊娠を希望しているかなどの情報から医師側が見識をもって患者を誘導することはある程度必要である。

また、薬の使用中・使用後のよくある副作用として不正性器出血があり、少ないけれども深刻な副作用として深部静脈血栓症や長期使用による骨密度減少の懸念がある。さらにホルモン療法をいつまで継続するのか、ホルモン療法継続中にどうやって閉経を判断するかなどの疑問もある。こうした懸念や疑問に対する具体的な答えはあまり教科書に書かれていないが、専門家の外来では様々な予防や対策がなされているものである。

本特集は、「ホルモン療法の使い分けと使用中・使用後のあるある」と題して、ホルモン療法を多く処方されているベテランの先生方にご執筆いただいた。本特集が読者の疑問を解決し、皆様のホルモン療法のレベルアップになって、患者がその恩恵にあずかることを期待してやまない。

(帝京大学ちば総合医療センター産婦人科 五十嵐敏雄)